

# 诗

# 11

# 2022

诗与画(上卷)



# 象限儀

能村 研三

## 登四郎青森の思い出

十月二十三日に「沖」の青森支部が発足することになった。コロナ禍で、地方で行う大きな行事が開催されなかったので、しばらくぶりの大きな大会になり多くの皆様とお会いできることを楽しみにしている。

「沖」が創刊して間もなくの昭和四十六年の夏、私はまだ大学生であったが、当時流行っていた「カニ族」を真似て、十数日間北海道を一人で旅した。その後、青函連絡船に乗り、父と落ち合ってから青森を旅行した。青森といえばその時のことを思い出す。

当時、登四郎の大学時代の友人で「沖」にも投句されていた三浦壽緑さんがおられ、下北半島の尻屋崎と津軽半島の童飛岬をご案内いただいた。特に尻屋崎近くの恐山に行った思い出は印象深く、登四郎も俳句を詠んでいる。一樹なき死者の山より道をしへ

しじみ蝶ふたつ先ゆく子の霊か  
登四郎は自註で「二人の子を殺している私にはこの山に子供たちの霊が住

秋風と秋気のこもる蔵座敷  
涼新たな蔵階段の下り急  
胸の内明かさぬ簾名残りかな

風素秋成すべきことの時間割  
手渡ししに夕刊貰ふ女郎花

秋澄むや四千万歩の象限儀  
辻々に山車の引き跡秋気澄む

先生の眼差しのまま菊作り

佐原吟行

馴染み深い青森の支部発足に、登四郎も泉下で喜んでるに違いない。  
今回は青森市内で支部発足の記念会を開いた後、翌日は弘前方面に吟行するが、次の機会には青森支部を拠点に尻屋崎や童飛岬にも旅を試みたいと思っている。

星くづの食感 二十世紀食ふ  
鬼やんま時代遅れの俺にくる  
背中押す風が秋声だつたかも  
どう見ても山形弁のラ・フランス  
晴れ晴れと空へ仰臥の捨案山子  
予報士の棒に台風気負ひけり  
巡回の女医さんが来て小鳥くる

店頭に栗が賑わう季節となった。みな形の良い大ぶりの栗ばかりである。昔を思い出せば山国の子としてよく山の中を遊びまわったが、この季節には茸や木通そして山葡萄があり栗があった。何でもあれば手当たり次第に採り拾った。栗は山栗というか柴栗という小さいものであったが、食べ物が無かったというより昔の人は食べ物を大事にしたと言うべきで、家の者は小さい栗でも丹念に剥き夜なべ仕事も厭わなかった。

今は裏の屋敷内に栗の木を五本植えてあり、まだ太くはないが大きい実でそれなりの収穫がある、当然栗ご飯となるのであるが、何しろ皮を剥くのも渋皮を剥くのにも面倒で時間がかかる。えいと逃げ出したくなるのであるが、それを耐えて剥き終われば自ずと登四郎先生の〈栗飯のふつくら炊けて祝ぎごころ〉という御句に出会えるのである。そして何か目出度いことがあれば赤飯を炊き栗おこわになるのである。

## 蒼茫集

つぶやき

林 昭太郎

アイロンの蒸気豊かに夜の秋  
海光に翹ふるはせて蝨斯  
のの字の眼持ちて案山子の伝統派  
月明や百畳の間の畳の目  
淋しさはいつも背より鱗雲  
\* つぶやきをかたちにすれば吾亦紅

月光の艶

甲州千草

博識の胸の薄さや生ビール  
桃を剥く野球談議の直中に  
溪流に覚めゆく五感初紅葉  
籠り居の減らす目薬秋立ちぬ  
冷房のからだ預くる仕舞風呂  
\* 月光の艶を貰うて青林檎

余力

高木嘉久

空蟬を守る静かな樹となりぬ  
\*さるすべりの百日目にもある余力  
鱗雲の夕べは使ふ歩道橋  
新駅の噂は消えて芋嵐  
洋館の隅の書斎の秋灯  
黒塀消え見越しの松は色変へず

指栞

栗原公子

\*指栞して初秋の風を聴く  
ソーサーに紅茶こぼる夜の秋  
原爆忌ひざ抱きて聴く吾が鼓動  
稚の頬つついて帰る盆の僧  
秋立つやオセロ一気の色変へて  
夏期講習と朝出て行つてそれつきり

落蟬

埴誠一郎

残暑なほ割印・捨印二つづつ  
老いてなほ角はとれずに冷奴  
落蟬や世の七曜を垣間見て  
\*追憶はなべて横顔走馬灯  
緑蔭の机一卓椅子二脚  
主役まだ譲らぬ勢ひつくつくし

密語

千田百里

少女期は枸橘（からたち）の実に籠めてあり  
秋高し魚になりたる雲の住み  
攻守分かつた命の水を菊人形  
\*月光と水琴窟の密語かな  
邯鄲の五分の魂もて鳴けり  
さてと腕組めば秋思の蹤いて来る

# 潮鳴集

モノクロの街

村上葉子

さびしくも不老不死なり水中花  
ひとりまだゐる夕暮れの緑蔭に  
孤独なる夜の噴水身を振る  
羅や風ゆるやかにまとひつく  
\*モノクロの街に向日葵見つからぬ

綱引き

川高郷之助

垂直に時さかのぼる墓参かな  
紅白に村を分断運動会  
\*綱引きの顔みな怖し鱚雲  
鉦叩奏曲は苦手らし  
一軒に玄関二つ赤のまま

蝸

中村重幸

そこまでがその先までへ秋涼し  
生きのびるために耐へゐる残暑かな  
送り火をすませしあとの黙の闇  
\*蝸や残るは死なる大仕事  
朝顔のせんなく風を掴む蔓

權の音

平松うさぎ

銀漢や胸に向田邦子置き  
杓酒の角にあらしほ新豆腐  
夕霧の峽より權の音のして  
稲妻の天網時を捉へをり  
\*躑口屈みし我と月の入る

海坂

小倉征子

秋灯を奢りぬ雨の田園忌  
海坂をふくらんでくる盆の波  
\*蹲に青竹渡す秋彼岸  
ゆゑもなく思ひ騒立つ鳳仙花  
積ん読の嵩を跳び越すいとどかな

きつね面

朝長美智子

千年のをがたま立てり村祭  
目の合はぬやうに夜店のきつね面  
\*盆北風や浜石を積む蟹の屋根  
浅漬のけふ新涼の塩加減  
探查機は宇宙に龍は深淵に

相聞は風

須賀ゆかり

\*山々の相聞は風秋に入る  
後ろ手に直すうなじや踊笠  
台風や位置情報は海を飛ば  
並び立つ鳥居の奥の秋暑かな  
明六つや蟬鳴き始む登り口

「またね」

七田文子

\*八月や命を濃しと思ふとき  
消火器はいつも定位置秋暑し  
「またね」とは明日ある別れ吾亦紅  
爽籟や木馬の脚は宙に浮き  
夜更しの窓閉めに立つ虫時雨

耳打ち

菅原健一

\*露草の耳打ち聞こゆるほど屈む  
鱚雲列車一本遅らそか  
コスモスの委ねし風に委ねられ  
水澄めりいよよ深まる水の黙  
葉鶏頭ときに少女はそら泣きす

文学全集

広海あぐり

さらさらと秋送り出す竹箒  
だしぬけの山雨あかるし吾亦紅  
総ルビの文学全集小鳥来る  
稲架解けてよりの人間ドックかな  
\*鉤曲がりかな列島も台風も

# 飛鷹選評



能村 研三

忘れられ秋風鈴となりにけり

西井薫美子

「秋の風鈴」というと飯田蛇笏の〈くろがねの秋の風鈴鳴りにけり〉という句が思い出される。夏の暑い時には、涼しげな音を奏でる風鈴が涼しさを演出してくれる。いつしか夏も終わり、風鈴を外し忘れたまま秋を迎えてしまった。今では爽やかな秋風の中に、変わることもない澄んだ音を響かせているのだが、夏には心地よく思えた風鈴の音も哀れに聞こえてくる。

更地には早刈萱の風を呼ぶ

牛島 晃江

「萱」は薄刈萱、白茅、荻などイネ科の多年草の総称で、多くは屋根を葺く材料という。高さが2メートルに及ぶものがあり、花穂が小さく、寂しげな風情がある。雌刈萱のほうが雄刈萱よりも美しく、粗毛のある葉腋から花穂を出す。早々と刈り取って更地になったところには心地よい風が吹いてきた。

鬼火の貌もちてかたくな鶏頭花

枇杷木 愛

鶏頭は、夏の終わりがころから茎の先端が鶏のとさかのような花が群れて咲く。色は、赤、黄、だいだい、赤紫など様々で、美しくはあるがとぎにしつこく、暗く見えることがある。見ようによっては頑固な鬼火の貌にも見えることがある。

観音の光放つや夕焼雲

坂井 博

夕焼の茜色に染まった雲を見ていると西方浄土の景と重ね合わせることができる。まるで観音様が放ったような茜色の光は日々、日常を照らしているはずなのだが、余りにも綺麗な夕雲に観音様の威光を感じた。

新涼や音澄みわたるガラス館

浜田はるみ

私もかつて石川県の能登島にあるガラス工芸館に行ったことがあるが、その工芸品は光を反射してきらきら光り、ガラスならではの透明感が美しい。新涼の頃ならば館内を響く音まで澄んで聞こえた。

咲きたれど供花にはなれぬ曼珠沙華

坂下 成紘

曼珠沙華は彼岸花、死人花、幽霊花などと、ちょっと不気味な呼び名があるが、墓に供花として捧げることはない。あの妖しい雰囲気は、自然のまま墓のそばに咲いて散っていくのが相応しいのかも知れない。

稲の香や道まつすぐに湖明かり

笠井 令子

笠井さんは河口湖の近くにお住まいなので、いつも湖明りに照らされる稲田に稲の成長を見ておられるのだろう。時折、風に乗って出穂の香が、真っ直ぐな道からむせぶほどの濃密さで流れ込んできたのだろう。

# 沖作品



## 能村研三選

\* 忘れられ秋風鈴となりにけり

市川

西井薫美子

\* 観音の光放つや夕焼雲

千葉

坂井 博

新涼の赤子ふはりと寝返りす  
秋暑し機嫌の悪きコンピュータ  
藤は実に介護ロボット研究所

梨甘し懐かしき名はおふくさん  
伝承の碑あり夏草丈をなす

千葉

牛島 晃江

八月の黙禱遠き日のいたみ  
錆びて尚南部風鈴古歌ゆらす  
纏れつつ草に溺るる秋の蝶

\* 更地には早刈萱の風を呼ぶ  
種採つて槍鶏頭の槍錆びぬ

静岡

枇杷木 愛

\* 鬼火の貌もちてかたくな鶏頭花  
末枯るる暖竹天へ風放ち  
冷やかに皮匂ふなか靴を選る  
風立ちちて蠟螂は斧休めをり

本棚の全集を焼く西日かな  
炎天に朱の迫り来る大極殿  
柔らかき団扇の風に目覚めけり  
万緑や人は儂と幸若舞

水槽の泡の独白夜の秋  
透き通る鳥の一声今朝の秋

埼玉

浜田はるみ

露草のひとむら瀬音高まりぬ  
\* 新涼や音澄みわたるガラス館  
さやけしや学校田の風が鳴る

遙か来て知覧の白き曼珠沙華  
忽然と咲き曼珠沙華忽と消ゆ

石川

坂下 成紘

\* 咲きたれど供花にはなれぬ曼珠沙華  
白解脱赤は煩惱曼珠沙華  
母遠し父なほ遠し彼岸花